
魔法少女戯曲

サクヤ・ダディーアナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女戯曲

【Nコード】

N8903T

【作者名】

サクヤ・ダディーアナ

【あらすじ】

甘い眠りから目覚めたまどか

そこは誰もいない地方都市だった

自分はなぜここにいるのか？

忘却（前書き）

はじめまして

サクヤというものです

この作品はウルトラシリーズリスペクトなところがあります
その独特な世界観を楽しんでいただければ幸いです・・・

実相寺作品は特に影響を受けてるので、興味がある方はぜひ見てみて下さい

忘却

「あれ？ここは・・・どこ？」

甘い甘い眠りから覚めた鹿目まどかは何か違和感を感じ取っていた。自分はすでに概念になったはずなのだが、身体を縛られているような感覚がある。

まるで人間に戻ったようだ。

「気分が・・・悪いや・・・。」

しかし人間を超越した存在であるまどかにとって、それは実にどうでもいいことだった。

むしろ何も無い中でちょうどいい暇つぶしが出来たとさえ思えた。だが身体の調子はどうどん悪くなっていく。身体中がミシミシ痛む。頭の中ではサイレンがワンワン鳴り響いている。

「気持ち悪い。きもちわるい。キモチワルイ。」

もうだめだ。限界を迎えたまどかは胃の中の物を吐き出そうとした。そのとき初めて自分が室内にいることに気づいた。

そこはボロボロのアパートだった。広さは四畳半だろうか？酷く狭い。

インテリアは机と座布団があるだけで、あとは流しと玄関があるだけのこざっぱりとした部屋だった。

外は薄暗い。夕方かと思ったがどうやら曇りのようで、いまが何時ごろなのかはわからなかった。

すこしあっけに取られたまどかだったが、すぐにまた気分が悪くなり、あわてて外に飛び出した。

玄関から一歩でて、ここが二階であることに気づく。目の前にあるサビだらけの柵の向こう側には一般的な地方都市が広がっている。古ぼけたビル。色があせた民家の屋根。ヒビだらけで今にも倒壊しそうな廃工場。大きめの駐車場を持つショッピングモール。天高くそびえる山々とそのふもとを走る線路と高速道路。見滝原では有名なローカルコンビニ。どれも極々ありふれた光景であった。だが人の気配がまったくない。さらには生き物の気配すらない。無音都市。

自分だけが取り残された世界にまどかは放り投げられたと感じた。いったい自分の身に何が起きたのだろうか？

そもそも自分は何者なのか？

思考が混乱していくのに比例して、吐き気が酷くなっていく。

ここでまどかは自分の胃に何も入っていないのか？それとも何か入っているのか？と考え出した。

そもそも食べ物を摂取した記憶がないため、前者はありえないと考えるも、もしかしたら何か食べたことも忘れていて、なにか固形物を吐き出すのではないかと考えた。

人間とは実にくだらけな生き物で、普段はすぐ熱くなって冷静に対応出来ないくせにこういうときに限ってなぜか冷静になってしまい、変な想像を膨らましてしまう。

だがそれでまどかはなんとなくうれしいと感じてしまった。

久しぶりに自分が生きているということを感じたからだろうか？

それはまどか自身もよくわからなかった。

「とりあえず、外を歩いてみようかな。」

まどかは気分転換に外を散歩してみることにした。

これで体調が戻るかは不明だが、何もしないよりはマシだ。

ギシギシ鳴く通路を進み、一階へと続く階段に向かう。

階段は金属製であるがすでにペンキははがれ、赤茶色いサビに覆われていた。それを踏み抜かぬよう慎重に階段を下っていくが、ギリギリとなにか不安になる音が響いていた。

13段全て下りきるとアパートの正面に出た。思っていたよりアパートは小さかった。そして街と同じようにアパートから人の気配は感じられなかった。

孤独はなれたつもりだったが、まどかの心の隅っこにはじんわりとしみが出来ていた。

だが涙は流さなかった。流せなかった。

アパートの周りは低いブロック塀で覆われていた。出口は今の場所からまっすぐ進んだところにあった。

近づいてわかったが、このブロック塀はところどころ新しいものが混ざっている。なんだか崩れたことがあるのだろうか？少し不安になりながらも、外へ向かう。

アパートの敷地から一歩出ると特に不思議な世界ではなかった。極々普通の住宅街がそこに広がっていた。

。ただ違うのは生き物がいないことだけ。

心細いが今は歩く以外選択肢がない。まどかはじめじめとした空気を浴びながら、目的もなくふらふらと歩き続ける。

アパートから500m進んだところに最初の曲がり角とぶつかった。どっちに進もうか。

こういうときすぐに決断が出せないのがまどかの悪い癖だった。

「そついや迷ったときはいつもさやかちゃんに相談してたっけな。」

かつて人間だったころの記憶を思い返すまどか。あのころは些細なことでも迷い、悩み、苦しんでいた。

いまはちがう。そんなしがらみから開放されていた。さやかもまどかも。

しかしそれはいいことなのだろうか？とたまに考えることがまどかにはあるが、いまはこの状況を受け入れるしかない。

「右がいいや。さやかちゃん、右利きだし。」

そんな適当な理由で右に曲がる。しかしなんだかさやかと歩いていくようで、少し勇気が出てきた。

角を曲がると駄菓子屋が見えた。「山内商店」と書かれた赤く錆びた大きな看板とボンカレーのホーロー看板がなんともいい味を出している。

「そついえば小さいころさやかちゃんや仁美ちゃんたちとここにきて遊んだっけ。よくここのおばあちゃんともお話したなあ。」

懐かしい気持ちがあふと心の中によみがえる。

春は駄菓子を買ってお花見をしようとここに集まった。

夏はプールの帰りに力キ氷を買って、真っ赤に染まった舌を見せ合っていた。

秋はおばあちゃんが焚き火で焼き芋を作ってくれた。

冬は静岡出身のおばあちゃんがおでんを売っていた。

「なんでこの建物があるの・・・？」

まどかはふとわれに返り驚愕した。

この駄菓子屋はまどかが10歳のときに行われた大規模な開発で取り壊されたからだ。

「ここは……。もしかして……。」

まどかの頭は急に冴えだした。そして心の奥底に閉まっていた記憶を呼び起こした。

ベランダから見た景色。それは紛れもなく旧見滝原だった。

歩いてきた道もこの駄菓子屋も全部。

今はない風景。それがなんで13歳のまどかが観ているのだろうか？

「わけが……。わからないよ……。」

そうつぶやくとまどかはしゃがみこんでしまった。

どうしてこんなことになってるのだろうか？

助けを求めるように空を見上げるが、相変わらずの曇天。まるで今のまどかの心を表しているようだった。

「なんなの？ キュウベえなの？ だれなの？ おしえてよ……。ねえ・
・。わたしは何でここにいるの……。？」

「世界を変えるため。」

後ろから声がする。

まどかはいままで生き物の気配を感じられなかったこの世界で、初めて気配を感じた。

ゆっくりと振り返るとそこにはパーカーのフードを深く被った人間がいた。

「あなたは・・・だれ・・・なの？」

まどかは震えながらも話しかけた。正直よく声が出たなとまどかは後に振り返る。

「さあ？答える義務はないよ。でも。」

そう言うですつとまどかに近づく。

「君にはやってもらいたいことがある。そのために君はここにいるんだ。」

フードから覗く口元がにやつと笑ったのが見えた。

「やって・・・もらいたいこと・・・？」

「そう。やってもらいたいことがあるんだ。それは・・・。」

一呼吸置いて、そいつはとんでもないことを言い放った。

「脚本を書いて欲しいんだ。ハッピーエンドのね。」

忘却（後書き）

次回予告

ほむらは感じ取っていた。
世界の異変を。

街にあふれる魔獣の群れ。

救われたはずの世界になにがおきたのか？

次回「崩壊する世界」

崩壊する世界（前書き）

炎の魔獣 イオ

氷の魔獣 エウロパ

水の魔獣 カリスト

巨大な魔獣 ガニメデ

登場

用語 and 設定（非公式のオリジナル設定です）

インキュベーター・・・陰と陽システムにより宇宙の成長を促進させる絶対生物。魔獣が産み出すマイナスエネルギーを宇宙の養分に帰ることが出来る。

魔獣・・・世界のバランスを整えるもの。過多になったマイナスエネルギーを元に誕生し、陰と陽のバランスを調整する。幸福のための障害ともいえる。

マイナスエネルギー・・・人間の負の感情が溜まった結果発生する。魔獣はこれを元に生まれる。

プラスエネルギー・・・人間が幸せを感じたときに発生するエネルギー。マイナスエネルギーに比べると溜まりにくい性質を持つ。

崩壊する世界

「やれやれ。また魔獣がでたね。出撃だよほむら。」

白いウサギのような生き物はわたしの肩に乗ると、きゅぷいとため息をついた。

「まったく。ここ最近の魔獣出現のサイクルは謎だね。けどま、ほかたちインキュベーターはたくさん出てくれるのがありがたいけどね。」

インキュベーター。もといキュウベえは無表情のままだ。感情のない彼らに表情があるわけがないが。

「とりあえず、巴さんと杏子に連絡を取ってみるわ。」

わたしは携帯をとりだすと、慣れた手つきで巴マミの携帯番号を打ち込む。

プル……。ガチャ。

コール音がなり終わる前にマミは電話に出た。いつものことだ。

「どうしたのかしら？」

マミが眠そうな声で応答する。無理もない今は午前2時。普通の中学生なら寝ている時間だ。普通の中学生なら……。

「夜分遅くすいません。巴さん、魔獣の反応がありました。数は3つほど。」

場所は一体は見滝原工業敷地内。もう一体は市民球場地地下倉庫。

最後の一体はセイクー屋上です。わたしとキュウベえはセイクーに向かいます。」

「OK。わたしは工場に行くわ。佐倉さんには市民球場に向かうようわたしが連絡しておくわ。」

「わかりました。では。」

ピツと携帯を切るとわたしは走り始めた。

急いで始末しなくてわ。誰かが傷ついてしまう前に……人間を。見滝原を守る。

それがこの世界を作った親友への誓い。

「まどか。わたし、がんばるから。だから……。」

最初に魔獣の元にたどり着いたのは杏子だった。

初夏のムシムシした気温の中で、市民球状周辺は真冬のような寒さだった。

「やっかいな魔獣だねえ。しかしま、避暑になると思えばいいかなあつと。」

夏らしく薄手のワンピースを着た杏子は身体をちぢこませながら、

市民球状周辺を見渡した。

人の気配はない。とりあえず誰かを巻き込んでしまうことはなさそうだ。

「さあて、とつとと片付けちゃうよ。変身！」

中指に入れた指輪が変形して、ソウルジェムと呼ばれる宝石に変化した。

ソウルジェムは「魔法少女」が「魔法少女」たる象徴で変身アイテムでもある。

杏子のソウルジェムは赤い色をしていて、それはまさに炎のようだった。そしてその赤にはどこかさびしげな色も混ざっていた。

魔法少女たちがソウルジェムにこめたものは願い。願いの大きさによってソウルジェムは強さを変える。

杏子の願いは「家族安泰」だがその願いは一時は叶ったものの、すぐに壊れてしまった脆くはかないものだった。

普通の人間だったら絶望して、何もかも壊してしまいたくなるであろう。

しかし杏子は違った。何もなくなくなってしまったのだ。希望さえも絶望さえも失った彼女に残された道は、「魔法少女」としてただ魔獣を狩り続けることだけだった。

それをやめたら自分の価値が本当になくなってしまふ。

いつそ死んでしまいたい、死ねなかった。

それはかつて神父だった父が事あることについていた「死という名の罪」に杏子は縛られてしまっていたからだ。
しかし

「さやか、行くよ……。」

杏子はそうつぶやくと、結界を張りながら倉庫内に進入した。

「おかしいわね。」

巴マミは疑問に思っていた。

ここ最近見滝原市では魔獣の発生率が高くなっていったからだ。

三人に中でももっとも慎重な性格をしていたマミは、ほむらが気づくより前に異変に気づいていた。

もっとも慎重すぎて友人が杏子とほむらしいないのだが……。

「なにか、嫌ななにかがあるわね……。でもわたしたちに来ることは……。魔獣を倒すことだけ。」

少し前までのマミは孤独な戦死だった。来る日も来る日も魔獣と戦い、誰も祝ってくれない一抹の勝利に一人喜ぶ。そんな毎日だった。彼女の世界が激変したのは仲間が出来てからだった。

明るくもどこか陰のある暁美ほむらと、芯が強く正義感の強い美樹さやか、そして狂犬のような眼をしていた佐倉杏子。

三人の同業者との出会いにより、マミの世界は激変した。

自分は一生孤独なまま、恋もせず、ただ淡々と生きていくだけだと思っていた。

そこに一筋の光が差し込んだのだった。

「それがわたしたちの仕事よ。」

マミはソウルジェムを高く放り投げ、くるりと一回転して、ステップを踏むと投げたソウルジェムをキャッチした。

「CHANGE!」

掛け声とともにソウルジェムが黄色く輝くと、マミは「魔法少女」

の戦闘服を身にまとっていた。

「さて、いくわよ！」

鍵がかかっている門を蹴り飛ばし、工場に侵入する。
そこは雨でもないのにあたり一面が濡れていた。

「水の魔獣ね。少し厄介なやつに当たっちゃったわね。」

マミはスカートからマスケット銃を取り出すと、臨戦態勢に入った。
身長に一步一步踏み出すマミ。そのたびに足元でピチャピチャと音がする。

そのまま工場の隅にある小屋に近づいたときだった。

「!？」

空気が一変した。

どうやら魔獣のテリトリーに入ったみたいだ。

マミは威嚇に1発空砲を撃つ。パンツと渴いた音が湿った工場に響く。

すると音に反応したのか、小屋の屋根を突き破って魔獣がその姿を現した。

魔獣の身体はスライムのようにドロドロとしていて、中が透けて見える。

中心には赤い球体があり、それをベースに6 mほどの楕円形の身体を作っているようだった。

「おでましね。」

マミは手からリボンのようなものを出すと、魔獣に向かって投げつ

けた。

リボンは巨大化しながら魔獣の身体を包み込むように、巻きついた。そしてスカートからマスケット銃を発生させると、そのまま拘束した魔獣目掛けて1発撃ち込んだ。

「効いたかしら？」

リボンの魔法で相手を拘束し、そのまま銃で仕留めるのがマミのスタイルだ。

しかしこの魔獣にはそれが通じないようだった。

さっきまで動かなかった魔獣が急にうねうねと動き出すと、全身を針のように尖らせて、リボンの拘束を破壊した。

「効いてないみたいね。」

そして針をさらに伸ばし、マミに向かって攻撃してきた。

それをよけつつマミはもう一度発砲するも、スライム上のその身体にはダメージはなさそうだ・

それならばとマミは、リボンを回収しながらスカートから液体の入った瓶を取り出し、蓋を開けたまま魔獣に投げつけた。

そして今度はスカートからいくつもの大砲を発生させる。

その一個一個には焼夷弾が装填されていた。

「NO1、2、ファイヤ！」

掛け声とともに大砲から焼夷弾が発射され、魔獣に着弾する。

魔獣に着弾した焼夷弾は炸裂するも、液体の身体の前では無力のようには思えた。

しかしさきほどマミが投げた瓶に詰まったガソリンに着火した。楕円形のその身体はオレンジ色の光を放ちながら、燃え上がった。

「NO3、4、5、ファイヤ!」

マミは残りの焼夷弾も一気に放ち、魔獣の身体をさらに燃え上がらせる。

どうやらこの攻撃は有効のようだ。

「このままおわらせて! テイロ!」

目の前に巨大なキャノン砲を召喚すると、燃え上がる敵に照準を合わせた。あとは引き金を引くだけだ。

「ファイナーレッツ!!!!!!」

ドゴンツと音を立てて、巨大なキャノン砲から放たれた砲弾は魔獣に命中し、炸裂した。

火柱を上げて燃え上がる魔獣は悲鳴を上げているようにも見え、その身体を激しく左右にゆするも数秒後には動きを止めてしまった。それを見届けたマミはティーカップを取り出すと熱い紅茶を一口啜った。

「なんなの……この魔獣は……。」

セイクー屋上で魔獣に戦いを挑んだわたしは、予想外の攻撃に一旦退却を余儀なくされていた。

現在地はセイクー店内の二階女子トイレ。

「爆発の能力を操る魔獣……」

敵の能力は爆弾を発生させ、それを投げつけてくる。それだけだと思っていた。

わたしは爆弾の届かない遠距離から、弓で攻撃していた。

その戦法は当たりで確実に魔獣の体力を削っていった、あと少しというところまでいっていた。

それは突然わたしの後ろに現れた。

「え？」

それに気づいたわたしは素っ頓狂な声を上げるしかなかった。

わたしの後ろにはなぜ気づかなかったのだろうか？ 大きな大きな魔獣がいたのだ。

15mはあろうかと思われるその魔獣はわたしにむかって、こぶしを振り上げていた。

とっさに回避行動に入ったが、そのとき不覚にも爆弾の射程距離に入ってしまったのだった。

「しまっ……」

気づいたときには目の前に爆弾が転がっていた。

「きゃああああああつ！！！！」

爆風をモロに食らってしまったわたしは、爆煙がもうもつと上がっている間にセイクー店内に逃げ込んだ。

なんとかトイレの個室に逃げ込んだわたしは、ソウルジェムの力で傷の治癒を始め、今に至る。

「だいじょうぶかい？ほむら。」

ふと気づくとキュウベえがトイレのタンクの上にいた。相変わらず憎たらしい顔だ。

「ええ、なんとか最小限には抑えられたわ……。けどもう一体の魔獣なんて聞いてないわよ？」

「あの魔獣はどうやら気配を完全にシャットダウンできる能力があるみたいだね。僕のリーダーにすら反応しないのは少々不可解だけどね。」

「ねえキュウベえ……。」

「なんだい？」

「魔獣の出現サイクルが早くなっただってあなたってたわよね？それってどういふことかしら？」

「そうだな。魔獣が人間のマイナスエネルギーが彼らを作り出しているのは知っているよね？」

「ええ、知っているわ。」

「実はそれ以外にも発生要因があるんだよ。この世は陰と陽のエネルギーバランスでなりたっているんだ。その陰。つまり人間の負の感情が大きくなりすぎると魔獣の発生エネルギーとして、消費されるんだ。けど幸福のエネルギー、陽の方に偏りすぎることが極々稀にあるんだ。そうした場合、調整のため大量の陰エネルギーが発生させて元に戻すんだけど、その後エネルギーを一定量に戻すため

一気にエネルギーを放出してしまうんだ。その結果、強力な魔獣が発生しやすいんだ。その現象自体は千年に一度あるかないかレベルのことなんだけど、実際に起きてしまうと未曾有の魔獣災害が発生してしまうんだ。今回の魔獣発生頻度の上昇とさっき現れた強すぎる魔獣もこれで説明がつくね。今回の件はぼくはこう推測するね。」

幸運になりすぎた世界ということか。なぜそれがいけないのか？誰も傷つかない世界。それはまどかが望んだ最高の世界ではないのか？ふとポケットの中から異音が聴こえた。どうやらケータイのバイブのようだ。

「マミさん・・・？」

相手はマミのようだった。魔獣討伐が完了したのだろうか？

「もしもし？」

わたしは小声で応答する。

「ほむらか？！あたしだ！杏子だ！」

相手はマミではなく杏子だった。どういうことだ？なぜ杏子がマミのケータイからかけているんだ？

「大変なんだ！マミが、マミが、魔獣に腹を貫かれて・・・息してねえんだよ！！」

杏子の悲痛な叫びとありえない知らせ。わたしの頭の中は混乱した。

「どういう・・・」

「杏子！ソウルジェムでの治癒は！？」

上手く返事が出来ないわたしに代わり、キュウベえが代わりに応答した。

「ああ、やってるよ……。やってるけど……。全然なんだ……。返事……。してくれないんだ……。なあ、マミ……。返事してくれよお……。」

杏子の嗚咽が受話器越しから聞こえる。

わたしも泣き出したいくらいだ。マミさん……。なんでこんなことに……。どうして……。」

「なんなのよ……。何なのよこの世界は！みんな……。みんな幸福になれたんじゃないの？！ねえ、まどかあ！？答えてよ……。まどかあ……。」

わたしは泣き叫びながら何度も何度もタイルにこぶしをたたきつけた。どうして……。どうして……。」

「！？わりい、見つかった。……。ちよつと行ってくるよ……。マミの仇を取りに……。なあ？さやか。」

わたしを正気に戻したのは杏子の言葉だった。

「逃げて……。杏子……。逃げてよっ！！杏子っ！！」

受話器越しに叫ぶも既に応答はなかった。もはや脳内では最悪の事態しか想像できていない。どうして……。どうして……。どう

して・・・。

「ほむら！上だ！上を見るんだ！」

「へ？」

わたしはゆつくりと上を見上げた。

天井にぽっかりと穴が開いており、そこから爆弾の魔獣が覗き込んでいた。

一瞬魔獣の顔が冷たく笑ったように見えた。

「いやあああああああつ！！！！！！！！！！！」

わたしの叫び声とケータイの電波が切れる音、そして爆音がわたしの最後の記憶だった。

崩壊する世界（後書き）

人々の幸福。その純粋な願いにより世界を崩壊させてしまったまどか。

人々は幸福を願ってはいけないのか？
そして謎の女の正体は？

次回「幸福」
おたのしみに

幸福の代償

まどかは震えが止まらなかった。
涙もぼろぼろ流れた。

目の前にある台本には、自分が創造した世界で大切な友人たちが殺されるというショッキングなものだった。

「これがあなたが望んだ世界の結末。」

「なんで……。どうして……。」

層繰り返すしかないまどかにフードの女は語りかけた。

「あなたが望んだ世界は、魔女の恐れを消し、悲しみを無くした世界。けれども、それは成り立たなかった。理由はわかる？」

まどかは彼女の問いかけに無言でいるしかなかった。
わからない。

「わからないって、感じかしら？ まあそうだよ。わからないもんはわからない。仕方ないね。」

女はふうとため息をつくとき、まどかから台本を返してもらった。

「あなたが考えた世界がどうして破綻したのか？ それはね、あなたが優しすぎたから。」

「わたしが……。優しすぎた？」

「そのおかげで晁美ほむら、佐倉杏子、巴マミはかつての罪や傷は消えないけど、理不尽な死に遭遇せずに人生を歩め、美樹さやかは最悪なバッドエンドを回避して、未練がなくなり浄化した。ここまではOK。けれどもね。」

ふと風が二人の間を通り抜けた。思えばこの町に来てから、風を感じていなかったような気がする。

「どういうこと……。それじゃだめだっていうの？ ほむらちゃんたちは……。わたしの友達たちは幸せになっちゃいけないって言うの?!」

まどかはその短い人生であまり「怒鳴る」という行為をしていなかった。怒鳴ると少々声が裏返っていた。しかしその叫びは悲しみや怒りが混ざった、今のまどかの心と不協和音のごとくマッチしていた。

「そういうわけじゃないよ。あなたの選択は正しいよ。」

「じゃあ……。なんで……。なんでみんなは……。幸福になれなかったの?!」

まどかは女をにらみつける。

それはまるで威嚇する獅子のようであった。

無理も無い。親友の笑顔を守るため、自分の人生を捨てた結果がこれだ。

「幸福……。か。いい言葉だね。感動的ではあるけど、あなたは少々意味を捉え間違えてるんだ。その結果がこれなんだ。」

女はまどかにそつと語りかけた。

「いいかい？幸福ってのはね、簡単に手に入るものではないんだ。大小さまざまな障害を乗り越えた先に手にする。これが幸福。けれどもね、あなたはその障害をほむらちゃんたちから奪ってしまった。」

「障害を・・・奪った・・・？」

「そう。あなたはこの世界を作ったとき、かつてインキュベーターたちが作り上げたルールを消すために、魔獣と魔法少女、インキュベーターの関係を作り直した。ほむらちゃんたちが不幸にならない程度のゆがみとしてね。けれども。」

空では雲が流れ出した。まるで止まっていた時が動き出したみたいだ。

「あなた、ほむらちゃんたちが可愛いあまりに魔獣以外の障害、取っ払っちゃったでしょ？」

「え？ああ、うんそう・・・ですけど・・・。」

まどかはばつが悪そうにしどろもどろする。

「そう、それが原因！魔獣以外で怪我することも無く、苦勞することも無く欲しいものが手に入り、人間関係で悩むことも無くって、世界にしちゃったの！その結果があれ！世界大崩壊！しってる？あの後、魔獣を倒す魔法少女がいなくなつて、見滝原壊滅しちゃうのよ？」

「だめ・・・なの・・・？」

「だめだめ！こんなのダメに決まってるでしょーが！ああ、やっぱり中学生に世界創造は無理なのよー・・・。」

女はしゃがみこむと、ああと言葉を漏らした。

「ど、どうすれば・・・いいんですか・・・？」

まどかは厄介な人にあっちゃったなあときき気味にしゃがみこんだ女のそばに近寄った。

女はすっと立ち上がると、さっきまでとは打って変わって、にこっと笑うとまどかの肩を叩きながら、話しかけた。

「ほむらちゃんたちに「障害」を戻してあげて。それは「幸福」を否定するものじゃなくて「幸福の引換券」なんだから。ね？14歳のわたし。」

「え？」

びつくりして女の顔を見る。

「えへへ。そうだよ。わたしはわたしだよ。鹿目まどか、22歳の鹿目まどかだよ。」

被っていたフードを外すと、淡い桃色の髪が姿を現した。

「いやあねえ。実は大人の自分を演出したくってさあ・・・。それで途中まで頑張ってみたけど、無理だね。やっぱり素が出ちゃうよ

お。ははは、やっぱかわんないね。」

「あの・・・えっと・・・どういうこと・・・？ははは・・・。」

状況が飲み込めないまどかはただ笑うしかなかった。

「わたしはほむらちゃんの時間旅行が産み出した可能性のひとつ。魔法少女のまま大人になったあなた。絶望から抜け出せなかったけど、ちゃんとこの年まで生きている可能性もあったのよ。それがあなたを選んだ道とどちらが正しいかは比べられないけどね。」

「別の時間軸のわたしってこと？けれどなんであなた・・・ううん、わたしがわたしの前にいるの？本当なら交わるはずが無いんじゃないの？」

「そうね。上手く説明できないけど、わたしの時間軸だけに14歳以降のわたしが存在できてるみたいなの。そのせいか束ねられた因果の系にならなかったみたいなの。ここにわたしが来たのは、ちょうど14歳のわたしが作った世界が22歳のわたしの世界、それぞれが表裏関係になったの。けれども歪な世界とくつついたせいで、バランスが崩壊しちゃって、それでわたしがここに、あなたとわたしの記憶に残った見滝原に呼ばれたみたい。」

「14歳のわたしに世界を直させるために？」

「まあ誰が呼んだかは分からないけど、そうみたいだね。さて、長話もそろそろ終わらせようか。そしてあっちの世界のお話は元に戻さなきゃ。」

14歳のまどかはごしごしと涙を拭くと、立ち上がった。

「ごめんね。みんな。でも、すぐに書き直してあげるから・・・。」
「まってね。」

願い（前書き）

まどかにより、悲劇の物語は書き直された。

改定前よりは道は険しくなった。

しかしその先の未来を輝かせることが可能となった。
だがそれは果たして正しいことなのだろうか？

答えは分らない。

いや、その答えは出してはいけないのかもしれない。

願い

「酷い話ね……。幸福な人が多すぎるとさらに酷い世界になるなんて……。誰もが幸福で、傷つかない世界……。そんな世界はだめなのかしら……。？」

「誰もが傷つかない世界。いい世界だね。感動的だよ。でもほむら、世の中つてのはいつも幸福ではないんだ。時には迷い、挫折し、絶望する。けれどそれを乗り越えた先にある幸福こそが真の幸福なんだよ。うわべだけの安い並べられた幸福は、形だけはいいいけれどいずれ真の幸福をにじませてしまう。」

言わされているような台詞をぺらぺらとしゃべりだした。しかしこの生き物は常にそんな感じのしゃべり方だ。わたしは特に気に留めなかった。アニメやドラマのキャラクターじゃあるまいし。ふとキュウベえはトイレの外を警戒しだした。

「ほむら、わずかだけれど気配を察知できたよ。傷のほうは大丈夫かい？」

「なんとか……。大丈夫よ……。」

ふとポケットの中の携帯が震える。相手はマミからだった。

「そっちはどうかしら？」

どうやら討伐が完了したようだ。

「すみません。ドジっちゃって、治療中です。魔獣は・・・まだ倒せてません。」

「わかった、救援に行くわ。けどわたしが救援に行くからって、油断しちゃダメ・・・。ちょっと離しなさいよ!？」

受話器の向こうでなにやら揉める声がする。

「クスッ。」

またか。

「あーあー。ほむらかあ。実はな、マミのやつ油断して、やられそうになってたんだぜ。」

受話器を奪ったのはやはり杏子だった。

「う、うるさいわね。」

「それがえらそうに『油断しちゃダメよ』だもんなあ。でもま、ホント油断すんなよ。あんたがダメージ受けるくらいはやつだ。相当な手誰だろ?」

「わかったわ。なんとか救援まで戦ってみるわ。それと・・・。」

「ん?! どうした?」

「うっんなんでもない。なんでもないわ。じゃあまた・・・。」

ピッと通話終了ボタンを押す。

わたしは少し泣いていた。大切な友を失ったわたしは、もう何も無いものだと思い込んでいた。

まどかがいない世界など生き殺しだとも思った。

残された自分、空っぽの自分、それを埋めるために戦い続けてきた。最後まで一人ぼっちでいい。まどかに会えない苦しみはそんなことまで考えるほどだった。

けれど違う。それは違う。まどかが望んだのはそんなわたしじゃない。

共に遊び、共に悩み合える大切な友達。そんな友達と笑い合える暁美ほむらの日常。それがまどかが望んだこと。この世界に託したこと。

バミミ、佐倉杏子。最初はただの仕事仲間という感覚で付き合っていたが、いつしかそれは真の友情として芽生え始めていた。

「バミさん、杏子、ありがとう・・・。」

涙を拭くとわたしは、立ち上がった。

「いくのかい？ほむら。」

「ええ。たぶんあの魔獣を倒すのは一人では無理ね。けど、仲間が・・・友達が来てくれる！」

まどか、わたしわかったよ。だから、心配しないで。わたし、幸せだから！

道しるべの無い長い長い坂道

「よし終わった。」

まどかと23歳のまどかは、先ほどのアパートにいた。

コタツの上には原稿用紙数枚と筆記用具だけが置かれていた。

まどかは原稿用紙の消しカスを払うと、トントんと揃えた。

「これで暁美ほむら、佐倉杏子、巴マミの未来は変わり、先がわからなくなった。」

「けど、本当にそれでいいのかな？」

「いいんだよ。それで。それが人間としての幸福なんだよ。」

23歳のまどかは窓を開けた。

「なつかしいな……。この風景、わたしたちのいた見滝原じゃもうみられないんだよね……。」

「ねえ、わたし……。なんか変だな……。まあいいか。ねえ、わたし。あなたがいる世界はどんな世界なの？」

「聞かないほうがいいわよ、わたし。たぶんそのほむらちゃんたちが住んでる世界が平和に思えるくらい……。」

嫌な沈黙が部屋を包んだ。

「……ごめん……。」

14歳のまどかは消えそうな声でつぶやいた。

「大丈夫、大丈夫よ。わたしが進んだ道だもの。後悔なんてしてないよ。」

23歳のまどかはにつこりと笑った。その笑顔はどこか陰を孕んでいるように見えた。

「けどよかった。わたし、わたしを救えたんだもん。このままだったら絶対、後悔していたでしょ？」

23歳のまどかは窓をそつと閉めた。

「そろそろいこうか。もうみんな大丈夫だから。この先何起きても乗り越えられるよ。きっと。」

14歳のまどかはうなずいた。

「ほむらちゃんは強い子だもん。大丈夫だよ。絶対。」

「じゃ、行こうか・・・。」

23歳のまどかは玄関のドアを開けた。

こうしてほむらたちの新しい物語は始まりを告げることとなった。

道しるべがあり何でも思い通りに行く平坦な道。

道しるべの無い長い長い坂道。

それはどちらの道が正しいのだろうか？答えは分からない。

しかし、ほむらたちはどちらにしても、歩き続けなければならない。
その物語はまた別のお話。

道しるべの無い長い長い坂道（後書き）

とりあえず完結です

なんかわけの分からない文ですいません・・・

実は当初予定していた話と、結構違ったりしています

その名残が一話の前書きですね

どこが実相寺やねん（藁）

でも感想を送ってくれる人がいたり、たくさんの人が見てくださったりでとても楽しかったです。

すこしたら次回作を発表できると思います。

そちらもお楽しみ下さい。

ではこの物語は終わります。

ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8903t/>

魔法少女戯曲

2011年10月9日07時44分発行